

まえがき

はじめまして。あるいは、いつもお世話になっております。湯浅和海（ゆあさかずみ）と言います。

私は普段、自分のブログでかなり多岐にわたる論点について記事を書いていきます。瞑想や呼吸法の実践方法から始まって、人生論や哲学的な論考、幸福論や精神的な洞察など、取り留めなくその時々で思いつくことを書いてきたのです。

そして、これまでに八冊の本を執筆してきて、それぞれの領域についてカバーしてきました。たとえば、「精神分析的な仕方では身体を読み解く呼吸と瞑想の本」を書いたり、「人間の精神的な成熟のロードマップ」について詳述したり、「心で感じ

たままに幸福に生きる方法」について説いたりしてきたわけです。

ですが、そんな中で、まだ本の中でメインテーマとして扱ったことのない領域がありました。それが、「社会論」です。

私たちはみんな「社会」の中で生きています。ヒマラヤの山奥にでも隠遁いんとんしない限り、「社会」から無縁でいることは誰にもできないでしょう。それゆえ、「社会の一員である」というのは、私たちほぼ全員の「前提事項」なわけです。

きっとあなたもそうであるはずです。あなたはとある家庭の一員であり、とある地域の一員です。また、学校や職場の一員であるかもしれませんし、趣味の集まりの一員である人もいるでしょう。私たちは皆、必然的に「社会」の中に存在しており、誰もがその一員であるわけです。

でも、そもそも「社会」っていったいなんでしょう？

私が考えるに、「社会」とは「人々の集まり」につけられたラベルです。

これは「社会」だけに限った話ではありません。たとえば、「家族」という言葉も、「人の集まり」につけられたラベルです。そこには「父親」と「母親」と「息子」や「娘」などがいて、彼らが集まって生活している時、私たちはそこに「家族」というラベルを貼っているわけです。

しかし、実際にそこにいるのは、「一人の男」と「一人の女」と「一人の子ども」だけです。この三人の「個人」はそれぞれに「ユニーク」で他の誰とも代替できません。そして、そんな三人の「個人」をひとまとめにして呼ぶ時に、私たちは「家族」というラベルを使うのです。

同様に、「学校」や「会社」というものも、「人々の集まり」につけられたラベル

です。校舎や社屋といった建物そのものが「学校」や「会社」なわけではなく、そこに人々が集まって、勉強したり働いたりする時、私たちはそこに「学校」とか「会社」とかいったラベルを貼るわけです。

それゆえ、「村」も「町」も「市」も「県」も、さらには「国」というものでさえ、全ては「人々の集まり」につけられたラベルに過ぎません。国会議事堂や総理大臣や天皇陛下が「日本そのもの」なのではなくて、あくまで「日本」というものは、「日本人の集まり」につけられた名前に過ぎないわけです。

そういう意味で、これらの言葉には「実体」というものはありません。たとえば、校舎という言葉には、「特定の建物を指す」という実体がありますが、「学校」というものは「これこそが学校だ」という形で指し示せるものがないのです。

だからこそ、「家族」のメンバーがバラバラになってしまうと、「家族」という言

葉も一緒の意味を失います。もちろん、「それでも心ではつながっている」と思うのであれば、「家族」という言葉は使えますが、だからといって、「家族」という言葉に実体が付与されるわけではありません。「家族」という言葉は、あいかわらず実体を持たないまま、一種の「観念」として、私たちの生き方に影響を与え続ける、「お化け」みたいなものなのです。

「社会」という言葉は、これらの言葉の最たるものです。そこには「これ」と言っ指し示すことのできる実体がありません。そこには「人々の日々の生活や個人的な活動の集積」があるだけであり、私たちはそれらをひとまとめにして、「社会」というラベルを貼っているわけです。

そういう意味で、「社会」というのは、非常に便利な言葉です。なぜなら、「社会」という言葉は、「なんだかわからない人々の集まり」にぼんやりした輪郭を与

えてくれるからです。

しかし、時にこの言葉はあまりに便利過ぎてしまうことがあります。それゆえ、問題が発生することもあるのです。

それは、「日々を生きている一人一人の人間の命」よりも、「社会」という言葉のほうが、リアリティを持ってしまう場合に生じる問題です。

実際、人々はこう言わないでしょうか？

「この社会で生きていくにはこうするしかないんだ」

「今の社会で受け入れられるには、嫌でもこれを受け入れるしかない」

こんな風に、私たちは「社会」という「実体を持たないお化け」に対して、「自

分は無力だ」と感じることがあります。「社会の前では自分なんてちっぽけなものだ」と感じるわけです。

その時、その人は「顔のない人々の群れ」の前にたった独りで立っています。「相手の正体」もよくわからないまま、当人は「負け戦」を強いられます。そして、時には実際に深く傷つけられることになり、苦しむことになるわけです。

たとえば、学校のクラスでも、「ある種の空気」が醸成されると、それ自体が「力」を持ち始めることがあります。「一人一人がどう思っているか」ということは関係なく、実体のない「場の空気」がそこにいる人々のことを支配し始めるわけです。

こういった時、私たち一人一人の「個人」は、「顔のない人々の群れ」によって、時に自分の意志を捻じ曲げられ、「したい」と思うことを阻まれます。しか

し、それでいて、「こいつがその犯人だ」と名指しできるような人間はどこにもおらず、私たちは振り上げた拳を叩きつける場所を見つけられませんか。つまり、こういった「戦い」というのは、そもそも最初から「アンフェア（不公平）」なわけです。

一対一の決闘ならば、当事者同士は「相手の顔」を見ることができません。ですが、「社会」と「個人」とが向かい合う時、そこでは一方的な蹂躪じゅうりゃんがなされます。その人は、「顔の見えない人々の群れ」によってバラバラに切り刻まれたあげく、一方的に磨り潰されてしまうのです。

作家の村上春樹はかつて、このような「顔の見えない力」のことを、「システム」と呼んだことがあります。そして、彼はこの「システム」を「堅牢な壁」とし

て描写し、私たち一人一人の魂を、そんな「壁」に叩きつけられて割れる「卵」として語ったのです。

彼は2008年のエルサレム章受章スピーチで、こんな風に言っています。

非常に個人的なメッセージをひとつお伝えすることを、お許し頂きたいです。これはわたしがつい昔、フィクションを書くときにいつも心に留めていたことです。紙に書いて壁に貼り付けるというようなことはしたことがありませんが、わたしの心の壁に刻みつけてあるもので、それはこのようなものです。

「高く堅い壁とその前で壊れる卵の間に置かれたら、わたしはいつも卵の側に立つ」

そう、どんなに壁が正しかろうと、どんなに卵が間違っていようと、わたしは卵の側に立ちます。どちらが正しくどちらが間違っているかを決めなければならぬ人もいるでしょう。時や歴史がそれを決めることもあるかもしれませんが、でも、いかなる理由であれ、小説家が壁の側に立って書くとしたら、その作品にはどんな価値があるのでしょうか？

私は小説家ではありませんが、「個人(卵)」と「システム(壁)」とがもしも対立した場合、私もまた「卵」の側に立つことにしています。私にとってそれは、「顔のない人々」ではなく、「血の通った命」のほうを支持するということです。確かに、私たちはしばしば「間違い」ます。「社会」のほうがずっと効率的に、「正解」を量産できるのかもしれませんが。

しかし、それでも私は「個人の命」のほうを取ります。なぜなら「間違うこと」は、その「個人」にとっては貴重な成長の一部であり、その人の「生の軌跡」そのものだからです。

私は「顔のない正しさ」によって裁くことより、あくまで「個人の生命力」というものを信頼することにあります。

もちろん、私たちは誰もが「脆い卵」です。

「社会」というものの強力な圧力の前では、私たちは為す術もなく、磨り潰されてしまうでしょう。ですが、だからこそ、私たちは「血の通っていないシステム」ではなく、「血の通った個人同士の連帯」をこそ、信じるべきだと私は思っています。

なぜなら、もしも私たちが「自分の命」に従うことをやめ、「社会」に従うことしかできなくなってしまうたら、「社会」はますます私たちのことを容赦なく磨り潰すようになっていってしまうからです。

本書では、「社会」というものがどんな風に「力」を持つに至り、どのような仕方ですべて私たちに支配しているのかを明らかにしたいと思っています。「顔のない力」が「私たち個人個人の命」を叩き割り、磨り潰していくその力学的な構造を、分析してみたいと思います。

しかし、それは決して陰謀論ではありません。なぜならここには、「単一の悪いヤツ」が一切存在しないからです。

実のところ、「社会」が「力」を持つようになってしまう原因は、私たち全員の中にあります。私たち自身が、「自分自身の命」に従うことをやめ、「自分で感じ、自分で考える」という生き方を、みんなでそろって放棄した時、「社会」というものは致命的な仕方です。暴走することになるのです。

歴史上の大量虐殺というのは、みんなそのようにして起こりました。当事者である人々自身が、「自分自身で感じ、考える」という在り方を放棄して、独裁者に全てを一任してしまったことで、「全体主義」というものが到来することになったのです。

「全体主義」の中においては、「国家」という「顔のないシステム」が主権を獲

得し、個人の生活は抑圧され、監視されます。しかし、こういった事態を引き起こした「本当の原因」というのは、権力機構のトップにいる独裁者の中だけに在るわけではなく、その国に生きる人々皆の中に在ったのです。

その「本当の原因」は、多くの人々が、「自分の命」に従って「個」を生きることを放棄して、盲目的に「システム」に従ってしまったことです。そして、そういった「自己放棄」が連鎖的に広がる時、そこには「全体主義」が出現することになります。そこから、「言いたいこと」も言えない状況が作られていき、「言いたいこと」は全て封じ込められます。つまり、「個人の尊厳」よりも「全体の利益」のほうが常に優先されることになるのです。

もちろん、それによって「社会正義」が実現するのかもしれないし、必要な物資を効率的に生産できるのかもしれない。

しかし、そこで生きる人々の幸福を犠牲にして実現する「正義」に私は価値があるとは思いませんし、私たちは効率よく生産するために作られた機械ではなく、一個の「血が通った人間」なのです。

よって、本書では私なりの仕方で、「システム」という「堅牢な壁」に向かって、ささやかな抵抗を試みたいと思っています。私たち一人一人が持っている「魂の重み」と「自分の命の迸り」とを、あなたが思い出せるように、言葉を紡ぐつもりです。

あなたが「壁」に寄りかかって取り込まれることなく、「一個の卵」として目覚め、「脆い卵同士の連帯の輪」に加わってくれることを、私は切に願っています。

それでは、話を始めていきましよう。